

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
随筆	「日々をいとおしみて」より「あの時の夏」	宮川典子	2
歴史	維新の元勳「大久保利通」についてーその2ー	臺 一郎	3
歴史	「了解日本(日本を知る)」(13)「長崎のみどころ」	兪彭年	5
回顧	有楽町慕情(10)「矢野恒太と石坂泰三(2)」	津田孚人	8
事務局			10

TENTI TODAY

8月6日の日曜日、広島原爆記念式典と甲子園での夏の高校野球の開会式がありました。開始時間が1時間ずれましたのでTVで両方見ることが出来ましたが、原爆記念式典、岸田首相のコメントがあい変わらずで、ガッカリしました。国際情勢を見ると武器としての核使用の危険が身近に迫っています。唯一の被爆国、核の不使用について積極的な発言があってしかるべきでした。

転勤で広島に2年住み、離れて50年近くになります。しかし、当時目にした原爆被害の傷跡は、今でも記憶に残っています。川のほとり、あちらこちらで、それぞれの慰霊碑に祈りを捧げている遺族、今年もテレビに映っていました。原爆資料館に初めて連れて行ったとき、8歳の長男は吐き戻したと家人は今年も言います。

甲子園の開会式、コロナ禍のために出来なかった選手全員の入場行進で高校球児の喜びの気持ちがよく伝わりました。堂々とした行進、選手たちの体格の良さは大学生に負けなようです。第二、第三の大谷翔平が出てくるかもしれないという期待・・・楽しみです。猛暑の中での試合、いろいろと対策が講じられていますが、甲子園の地でいつまで行っていくことができるのか、余計な心配をしています。

母校・桐朋中学校の男子バスケット部が、東京都、関東地区の予選を突破して、初めて全国大会に出場するとの知らせが来ました。大会は、香川県高松市で行われるとのこと。応援には行けませんが、バスケットボールを始めた中学1年時の75年ほど前を思い浮かべ、気分を明るくしています。

大学のバスケットのリーグ戦は9月初めから。関東大学リーグの3部という久しぶりの上位リーグなので、全試合応援に行くつもり。試合日は、土・日で、計11試合、慶応、立教、国学院、明治学院など、古豪との対戦もありわくわくしています。最近は、何事もこれが最後と思い、機会があれば、できるだけ参加することにしています。

会 員 の 広 場

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

「あの時の夏」

昭和20年8月1日、私は信州佐久の中込町軍需工場宿舎で、専門学校の入学式に臨んだ。学徒動員令により、そこで働くことになっていたが、部品が一つも入荷しない。代わりに畠の草取りに駆り出された。農家では働き手が皆兵隊に取られ、私たちは幾らか役に立ったことだろう。陽ざしは東京よりずっと強いが、高原を吹く風は心地よい。

あれから75年目のこの夏、あるきっかけで浅田次郎著『終わらざる夏』を読んだ私は、強い衝撃を受けた。時代は正に私が中込にいた頃、場所は千島列島最北端の占守(シュムシュ)島、ここでの軍隊や民間人の各自の葛藤が細かに語られている。

米軍が北から攻めて来ることを想定して優秀な軍隊と兵器を配置してあった。一方、敗戦色の濃い中で和平に備えてか、45歳にもなる医師や英語通訳者も招集されていた。民間人としては原住民、日魯漁業の社員とその家族、更に北海道の女学校を卒業したばかりの挺身部隊400名がいる。彼等は中込の私たちと同年代ではないか。

中込のある長野県は有数の農業地なのに、夕食は米とじゃがいもと大豆を同量に混ぜた主食が茶碗に軽く一杯、それに味噌汁と青菜のお浸し、その青菜がざらざらしていると思ったら、昼間畠で雑草として抜いた「あかざ」だった。

同じ東京出身の友人3人と毎日浅間山を眺めては、家に帰りたいと涙を流す17歳の哀れな乙女であった。兵器をつくる工場に来たのに、部品が一つも入荷しない異常な状態だ。こんな無意味な戦争をなんで続けるのかと心で思っても、口には出せない当時の世相である。

8月6日広島に新型爆弾が落とされ、物理の教官から説明があった。女学校3年までしか授業は受けておらず、軍需工場で働いていた私たちは、黒板に書かれた分子式が一つも理解できなかったが、都市を一瞬に破壊する恐ろしい爆弾だということは分かった。9日には長崎にも落とされた。日本中の国民が「神国日本を守れ」「一億玉砕」と唱えながら戦いを続けてきたが、遂に8月15日終戦の玉音放送が流された。

その直前の9日、ソ連は日ソ不可侵条約を破って日本に宣戦布告し、19日に占守島に攻め込んできた。日本軍は優勢でありながら米英に無条件降伏をしたため、この不法なソ連軍に手を出せないもどかしさ。

しかし、浅田次郎はソ連兵の中にも割の合わない思いをした人々がいることを書いている。ワルシャワの大激戦で独軍を降参させ、モスクワへがい旋するはずが、何も知らせられないままそこを素通りしウラル山脈を越え、極東の軍港からカムチャッカに上陸、日本との戦いをさせられた一隊があったことだ。

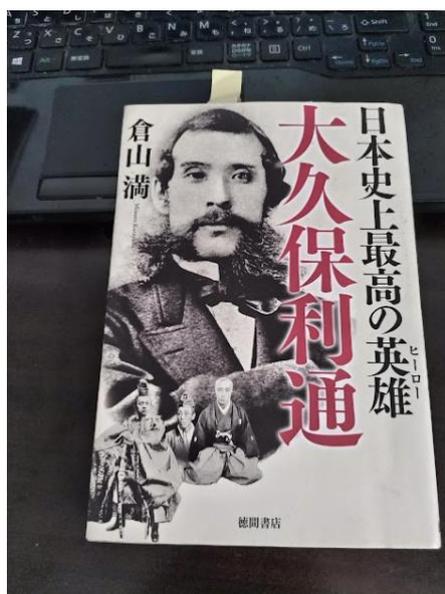
それより前ソ連軍が攻めて来ない内に、軍部が必死で女子挺身隊を北海道へ帰そうとした努力は報いられ、彼女たち全員親元に帰れたのは何よりであった。けれど

も道義上十分力を出せなかった日本兵はシベリアに送られ、酷寒の地で過酷な労働を強いられた。

もっと早く終戦を考えたらと今になって思う。遅れた故に占守島の人々が被った苦衷はあまり知られていない。それだけに、この『終わらざる夏』は偉大な小説であると心から思う。この小説が多くの人に読まれ、戦争は割りの合わないものだということを世界中の人が認識して欲しい。

維新の元勳「大久保利通」について—その2— 臺 一郎（75歳）

倉山満「日本史上最高の英雄 大久保利通」



島津斉彬が薩摩藩主となった 1851 年頃、西郷隆盛は親しい下級藩士らに声をかけ、朱子学の学習書「近思録」を輪読する会として精忠組を結成した。西郷と同じ郷中出身で藩の現状に同様の問題意識や危機意識を抱いていた大久保利通は、税所篤や吉井友美らの幼なじみと共にこの会に参加した。

会の活動内容には、今後の薩摩藩政のあり方を考えるというかなり政治的な一面も含まれていたが、西郷への信頼が厚かった藩主島津斉彬はこれを公認した。その後 1858 年に斉彬が急死すると、斉彬に寵愛されていた西郷は失脚し、奄美大島へと遠島された。このため精忠組は西郷に代わって大久保がリーダーとなった。

折しも江戸では、大老井伊直弼により安政の大獄が断行され、全国の諸藩では攘夷派や改革派の藩士が多数拘束され、或いは斬首されるなどの弾圧が行われた。

精忠組は井伊直弼によるこうした尊皇派や攘夷派の弾圧に強く反発し、水戸藩有志らと組んで井伊を排除する可能性を模索し始めたが、斉彬の次の藩主島津茂久及びその実父で後見人となった島津久光から過激な行動を控えるようにと諫められ、計画は頓挫した。やがて精忠組は解散となるが、この頃から大久保は薩摩藩の藩政に対する自身の影響力を高めたいと考えるようになった。

そこで大久保は同じ郷中出身で親しかった税所篤らの協力を得て、国父として藩政に大きな影響力を有していた島津久光への接近をはかった。具体的には税所の

兄が久光の囲碁の相手であることに着目した大久保は、税所の兄経由で藩政改革に関する意見書を久光に提出すると共に、自身も囲碁の腕を磨き、税所の兄の口利きで島津久光の囲碁相手として近づくことに成功した。

囲碁相手として久光と接する機会が増えた大久保は、折りをみては藩政に関する意見書や提案書などを久光に渡すようになり、久光にその存在と能力を印象づけていった。

久光の覚えがめでたくなるにつれ、藩士としての大久保の地位や役職も急速に高まっていった。前回も触れたように、1861年文久元年には御小納戸役に抜擢され、晴れて薩摩藩の重役として藩政に参加するようになった。またこれも前回に触れたことだが、大久保は1857年の徒目付就任から僅か4年足らずで御小納戸役に就任したが、これは薩摩藩の歴史上でも類を見ないほどの異例の早さであった。

1862年、大久保は久光の命により京都政局に関与するようになり、藩の公武合体路線を主導し、一橋慶喜の將軍後見職や福井藩主松平春嶽の政事総裁就任の実現に尽力した。こうした働きにより、1862年末に大久保は御小納戸頭に昇進、小松帯刀、中山尚之助らと並んで久光側近となり、更に1863年には正式に御側役へと昇進した。

この頃の薩摩藩は島津久光が独裁する藩と見られていたが、京都外交や朝廷外交に関する限り、薩摩藩の活動を実質的に仕切ったのは大久保利通であった。京における大久保の巧みな外交活動により、島津久光は朝廷から信用と覚えを大きく高めたとされる。

1860年代を通じて、徳川幕府の全国300藩に対する統治力・影響力は明らかに弱まっていき、尊皇攘夷思想の高まりと共に、天皇や公家など朝廷の影響力や存在感が高まる中で、薩長土肥など西国の雄藩は幕府に対する姿勢や距離感、朝廷に対する対応や立ち位置などについて難しい判断と選択を迫られ続けた。

薩摩藩内において立場と存在感を高めていた大久保と西郷は、藩政の巧みな舵取りや的確な外交選択を主導することで、幕府や朝廷に対する薩摩藩の影響力と存在感を高めていった。

国家統治に関する幕府の影響力が弱まり、朝廷の存在感が高まると見た大久保は、公武合体路線を推進したが、徳側慶喜が將軍となり薩摩藩を軽視するようになるや、ただちに不仲であった長州と組んで倒幕路線へと転換した。

国家統治から徳川家が排除される可能性を感じ取った慶喜は即座に大政奉還(1867年)を宣言し、新たな統治体制の中でも徳川の影響力を残そうと目論んだ。しかし、大久保は朝廷の岩倉具実等と組んで王政復古の大号令を発するとともに、慶喜に官職と領地の返納を命ずる辞官納地を迫った。

これに反発した幕府軍と辞官納地を迫る薩長討幕軍との間に1868年(慶応4年)鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争)が勃発し、ここに旧幕府勢力が討伐されることとなった。

この間、大久保は1863年、公家の岩倉具実と組んで大原重徳を勅使として島津久光が薩摩の軍勢700名を引き連れて随行する江戸への勅使下向を実現した。そして久光一行の江戸からの帰路に横浜生麦付近で起きた騎乗英国人との出会い頭の殺傷事件や、さらにこの生麦事件を原因として英国海軍との間に起きた薩英戦

争、そしてその戦後処理を通じた英国との関係修復や攘夷思想からの脱却などにおいて、大久保は薩摩藩政の方向付けや政策選択を主導した。

さて 30 代における大久保利通、すなわち 1860 年代における大久保は、薩摩藩士として、藩の立場や影響力の増大そして藩益の最大化などを追求したのに対して、1870 年代のすなわち 40 代の大久保は、維新国家明治を率いる政治家として、税制、軍事、郵便、教育、医療等の整備など近代国家の基礎造りに取り組んだ。
(以下次回に続く)

さて次回の第3回では、最終回として、明治維新前半期の近代国家日本の政治リーダーたる大久保利通について、その役割や実績や貢献、何かと誤解の多い大久保の人柄や性格などを紹介したい。

「了解日本」(「日本を知る」(第13回))

愈彭年 (86歳)

長崎の見どころ

1. 王直の評価

2005 年 1 月下旬、安徽省黄山市郊外で、長崎県五島市の福江商工会議所の日本人有志たちが 2001 年 4 月に修復した王直の墓が、工具を手にした中国の大学教員 2 人によって荒らされた。このことは、中国と日本のメディアで報道され、大きな反響を呼んだ。なぜ、2 人の大学教師が破壊しようとしたのか。二人の教師は、王直は倭寇の頭目で漢奸であり、日本人は倭寇と漢奸の墓を修復しに来日し、これは中国国民に対する侮辱であり無視することはできないと考えたという。

当時、小泉純一郎が首相として靖国神社に何度も公式参拝したため、日中間の政治関係が冷え込み、日中の民間の感情摩擦が相次いで発生した。

- 1 つ目は、2003 年 9 月に珠海で起きた日本人観光客の集団売春事件があり、
- 2 つ目として同年 10 月に西安の西北大学外国語学院の文化パーティーで日本人学生 3 名と日本人教師 1 名が下品なパフォーマンスをしたことに対して中国人学生が当事者に対して懲罰を要求する抗議デモが起きた。
- 3 つ目は、2004 年夏に中国で開催されたサッカーアジアカップで、中国のサッカーファンが日本チームに対して不満を爆発させ、トラブルを起こした事件である。

なぜ、日本人は王直の墓を修復したのか？ 福江商工会議所の有志たちは、王直は日本と明貿易の仲介役として、特に長崎と福江に貿易利益をもたらしたと考え、崩壊した王直の墓を修復することは、日中友好を表す行為であると考えている。中国と日本では王直の評価は正反対である。

『辞海』(1999 年版) :

「王直(? -1560)は明代の徽州(現安徽省シエ県)出身で、明史では汪直と誤って表記されている。出身は無頼であり、嘉靖 19 年(1540 年)、海に出て私貿易を営み、倭寇と結託して五峰船主と称した。寧波の双龍港に拠点を構え、その後烈港に移

り、沿岸一帯を焼き払い、浄海王、又は徽王と称し、その後日本の肥前平戸に居を移した。嘉靖31年に徐海、陳東、蕭仙、馬謖を遣して倭寇の侵略を誘導し、同時に浙東、浙西、江南、江北に警告を発していた。その後、侵略は何年も続き、最後は総督の胡宗賢に降伏、杭州で斬首された。」

九州大学名誉教授川勝守氏の『日本近世と東アジアの世界』

「(中国政府検索の資料では)倭寇がもたらした災厄を引き合いに出し、頭首の王直と徐海を大逆非道な反逆者として描いている。しかし、日本では王直は五峰さんと呼ばれ、五島や平戸に豪邸を建て、薩摩の島津氏(注:薩摩は現在の鹿児島県西部、島津は領主)や山口の大内義隆(山口は現在の山口県東半分、大内義隆は領主)とも会い、博多の豪商神屋宗湛と筥崎八幡宮前で会談したと言われている。1543年に種子島に鉄砲を持ち込んだポルトガル人は、王直の日本行きの船に乗っていた。」

関西大学松浦章教授「中国の海賊」

「明朝の記録では王直は主に海賊とされているが、実際は海路で交易する商人である。-----明朝は王直を海禁令に違反した海賊とみなしたが、日本人は稀有な貿易商とみなし、彼が運んできたものは、当時の最先端技術で生産された中国製品であった。五島の領主である宇久氏が王直と密かに交易を取り決め、福江に邸宅を与えたのである。」

長崎県教育委員会編纂の『中国文化と長崎県』

「倭寇の指導者の一人に王直がいた。元々は塩の商人だったが、事業に失敗したため、海の密輸貿易に転じた。広東を拠点に日本、シャムなどで硝石、硫黄、生糸、綿花などを取り扱った。1543年(天文12年)、ポルトガル人を種子島に呼び寄せたのは、この王直である。やがて五島を本拠地とし、平戸の港を見下ろす高台に「印山寺屋敷」と呼ばれる屋敷を構えた。

王直は自らを「徽王(きおう)」と称し、2,000人の部下を従えていたと言われている。在日の明貿易の仲介人としては日本側の絶大なる信頼を受けた。1540年、王直は福江にやってきて、森友卯之助(注:五島地域の領主)に会い、交易を申し入れた。これに対して宇久盛親は、欣然と貿易を認め、唐人が住めるような中華街を建設した。」と書かれている。

明治維新前の日本人は中国のことを唐人と呼んでいた。

『中国外交辞典』(2000年世界知識出版社刊、唐家軒編)

「明朝成立後、明の皇帝朱元璋は日本に使者を送ったが、使者は日本の将軍に殺され、更に中国の南東沿岸には倭寇が横行していたので、明の皇帝は海上貿易を禁止することにし、民間の外国貿易を禁じ、沿岸住民に海に入って漁をすることを禁じ、中国と外国との公式貿易には勘合制度を採用した。

1374年に泉州、明州(現在の寧波)、広州の市船区分を廃止し、1403年、永楽帝の即位後、海禁を緩和し、1405年に市船区分を復活させた。

正徳、嘉靖の時代(1506-1566)には、ポルトガル人植民者や倭寇による沿岸部での密輸・略奪により、朝廷は海港を封鎖、船を破壊、海での漁業を禁止し、中国と外国との貿易が完全に禁止されるほどの厳しい措置がとられた。

龍慶年間(1567-1572)の初期、倭寇の東南アジア沿岸への侵略がほぼ収まった頃、

明朝は福建省勅使の杜澤民の提案を承認し、増収を目指して海禁を部分的に開放することにした。海禁は時に厳しく、時に緩く、明の宮廷内でも海禁か開国かの議論があったが、海禁が解かれるのは明の末期であった。

海禁の主な目的は海上侵入を防ぎ、海上の国境警備を強化することであり、一方、朝貢貿易は政府が独占していたので、明政府の貿易独占は海禁に含まれない。

明の禁海令は消極的な防衛政策であり、中国と外国の交流と収入に深刻な影響を与え、海上での密輸活動の抑制につながらないものであった。」

中国が明朝以降、徐々に衰退していった大きな理由のひとつに、明・清時代に断続的に行われた海禁がある。

王直は 20 年間密貿易に従事し、最後には逮捕され、首をはねられた。彼の罪は、海禁を破って密貿易に従事し、倭寇と結託して東南海岸を侵略したことである。王直はどのように評価されているのか？

中国の歴史学界では、王直は倭寇と協力して中国沿岸に大きな災難をもたらした悪事の張本人だという見方と、明朝の独裁支配と禁海令に反発した歴史的進歩者だという見方とがあり、「王直は徽商の優れた代表であり、禁海令に反対する先駆者だった」とまで言われるほどである。(2004 年 8 月、黄山市での国際シンポジウム)。

王直を考察するには、多面的な角度、多元的に論評されるべきである。王直は「海賊の商人」であった。当時の官僚である唐枢言は、「賊も商人も人間である。市場が開けば賊が商人になり、市場が閉じれば商人が賊になる」と言ったという。

政府の追及に対抗するためには武装しなければならないので、海上で武装密輸をするようになり、したがって武装密輸は海禁に対する必須の行為であった。当時の浙江省知事の朱煥は、「三尺の子も海賊を衣食の親と見なし、軍を代々敵と見なしている」と語っている。

長引く海禁は、沿岸地域の経済活動を著しく阻害し、沿岸民を困窮させ、沿岸商人に深刻な損害を与えたので、民衆も商人も海禁に反対したのである。

現地人は密輸品の回収を手伝い、食料や日用品を提供し、また政府軍の動静を通報するなど、武装密輸集団を援助・支援し、武装密輸集団は政府軍から人々を守るために最善を尽くし、現地人と武装密輸集団との関係は密接であったという。

日本人と結託して東南海岸を侵略し、「嘉靖倭患」を引き起こしたことは、罪悪滔天であった。

海上武装密輸の結果、中国沿岸部、朝鮮半島、日本、南洋(ルソン、アンナン、シヤム、マラッカなど)を結ぶ広大な海上貿易ネットワークができ、それを利用して西洋が東進した。この成果は、1405 年から 1433 年にかけて鄭和が 7 回の西洋に進出した海上ネットワークの続きとも言えるが、今回の主人公は官ではなく民であった。

海上貿易網の形成は、時代が求める自由貿易品の取引を反映したものであり、朝廷が推進した勘合貿易(朝貢貿易)が時代にそぐわないものでとくに淘汰されているはずのものであることを示すものだ。

明、清の二度の海禁で、中国の海による商人経済の発展が頓挫したのは、王直が最後に斬首されたのと同じで、残念なことであった。

武装密輸組織が活躍した時期は、日本の戦国時代(1467~1568)と重なり、戦争や社会不安、経済的なダメージが大きく、日本中の大名や家臣が中国との貿易を

希望したが、明朝が規定した勘合貿易により不可能で、自由貿易品という本当の意味での貿易を求めていた彼らの要望にはそぐわなかった。

そこで、日本は自由貿易品の密貿易を日明貿易に組み入れ、長崎は大陸に最も近く、船が行き来する島が多かったので、長崎の平戸や五島が王直の拠点となり、長崎にとって王直の密貿易は日明貿易の一部として歓迎された。更に長崎の人々は、王直が倭寇の頭首であることを恥じてなかった。

長崎県平戸市の中心部には、剣を持ち遠くを見つめる王直の全身銅像や、儒教の将軍のような風貌の銅像、王直らが使用した印山寺屋敷跡や六角形の井戸などがある。福江では、中華街の明人堂や六角井戸が、倭寇の銅像とともに保存されている。

私は平戸の旗松亭ホテルに泊まったことがあるが、夜、ホテルの従業員が5台の大太鼓で奏でる音楽で、王直船団の出航の壮大な情景を楽しみ、その感動は今も私の心の中に残っている。総じて、長崎県には王直のさまざまな遺品や伝説が残っており、長崎の人々は王直を誇りに思うように語っている。

しかし、長崎の観光案内には王直やその遺品、工芸品についての記載がない。「己の欲せざるところを人に施すなかれ」という考え方に中国人の感情を刺激することを恐れているのだろう。

平戸市には、米粉を原料とし、独特の風味を持つ「牛蒡餅」という伝統菓子があり、王直が伝えた中国菓子の原点と言われている。

有楽町 慕情 (10)

津田孚人(86歳)

前号(天地ネットワークテーブル545号)で、石坂泰三が、第一生命に入社し、専務取締役就任したことはお伝えしたが、社業にどのようにかかわったかは、ほとんど触れていなかった。民間の中小会社の経験が、戦後、財界総理と言われるようになった石坂の諸活動にまったく関係なかった、ということは考えにくい。そこで石坂泰三が入社した当時の第一生命の状況を、そして戦前を中心に極端な時代ではあったが、どのような経験をしていたのか、見直してみたい。なお、内容については第一生命70年史を参考にした。

社長、専務取締役、社外取締役2名の計5名でスタートした生命保険会社、社長の柳沢保恵伯は、統計学者、実質的に仕切って行ったのは専務の矢野恒太だった。創立して13年目の大正4年(1915年)8月、矢野恒太は社長に就任する。ほぼ同時に石坂泰三が入社した。

石坂泰三が専務取締役に就任したのは、昭和9年(1934年)で入社して13年目だった。奇しくも矢野が、創業から基盤を作り上げた13年と年数が一致する。

矢野は、社長就任後、後任の専務取締役に空席にしておいた。石坂が入社したときから13年間、ポストを空けて待っていた、とする推測も可能である。

会社がスタートして矢野は、まず「株式会社」でない「相互会社」であることを世間に知ってもらわないといけなかった。そこで「我が社の特色」という小冊子をつくり、「相互会社組織について」と同時に、「最大の会社たらんとするにあらずして、常に

最良の会社たらんとするにありという本領」、「確実、低廉、親切のモットー」などの基本方針を盛り込んだ。

営業面では、他社が採用していた代理店制度をとらず、社員による直販方式をとった。さらに少額契約での契約はコストがかかりすぎるので高額契約に絞り、無理せず漸進主義で、不良契約は排除するという方針をとった。

第一生命がスタートして2年後、国内2番目の相互会社として、千代田生命が創立された。社長には、慶応義塾の教頭だった門野幾之進が就任し、同塾出身者が中心となって経営にあたった。三井銀行が後援したこともあって世間の注目度は大きかった。慶応義塾が開校して40年、出身者は全国にちらばり、実業界はじめ各界で指導者として多く活躍、この縁故で千代田生命は各地に代理店を設け、積極的な募集活動を始めた。

千代田生命の参入で苦戦したが、懸命の努力をして紹介者の紹介で輪を広げ、東京地区では、「保険なら第一相互」という定評が出来あがっていった。さらに日本橋区通3丁目に、明治39年9月に完成した新社屋は、日本橋地区の名物の一つとなり、東京地区の開拓に大きく貢献した。

矢野は「相互会社について」の文筆活動を続ける一方で、青少年たちを指導する理念として孔子の説くところを普及しようと考え、「ポケット論語」を刊行、ベストセラーとなった。その部数は40万部にもなり、矢野の名は全国的に知られるようになった。

大正時代に入ると、業界競争は一段と激しくなり、＜東京中心で代理店を持たない営業制度＞は限界に来ていた。そこで地方強化をはかるために、外務職員を基幹とした地方部制をつくり、さらに支社へと展開を図っていった。

創業10周年の大正元年（1912年）、第一生命の業界順位は、33社中の11番目となり、名実ともに中堅会社の地位を確保したが、問題も多くなった。営業面では、保険種類は創業以来養老保険だけ、商品種類を増やす時期にあり、内部面では、増加する職員、特に地方職員のために会社の方針や、状況を知らせるツールが必要になってきた。

大正4年（1915年）8月、社長の柳沢保恵伯は交代の潮時と考え、第13期末をもって辞任した。そして専務の矢野恒太が社長に就任、9月に石坂泰三が逓信省を退任して第一生命に入社し秘書役となった。

入社後、石坂は、大正6年（1917年）9月から、ニューヨークのメトロポリタン社をはじめ、欧米諸国における生命保険会社経営の実際を、約1年2か月にわたって視察した。そして8年3月、支配人に任ぜられた。

営業面において石坂は、契約高の伸びも、資産の伸びも順調で、ことに事業費が他社の追随を許さないほど低率の今こそ積極策に転ずるべきとし、地方主要都市に増設された地方部の改組を進めることにした。

矢野社長も機会あるごとに地方に出張、各地の名望家と知己関係を結び、相互主義の啓蒙普及につとめると同時に、第一線にある外野の営業活動を擁護した。

積極策は成功、大正10年11月に契約高で同業43社中の第5位、初めて業界5大生保の仲間入りがなかった。加えて同年3月には、明治の末に購入した京橋区南伝馬町3丁目の土地に建設中の新本社社屋「第一相互館」が完成していた。新築披露は5日間にわたって行われ、初日の落成式には原内閣総理大臣はじめ朝

野の名士が出席して祝辞を述べ、世間の注目を大いに浴びていた。

「第一相互館」は、設計が辰野金吾、葛西万司、工事は高田組、清水組の請負、鉄筋コンクリート7階建て、エレベーターをはじめ近代的な設備を施した代表的な高層建築物で、東京の新名所の一つとなった。

大正12年9月1日の関東大震災で全館の3分の2強は火魔に侵されたが、建物の外観にはさほどの損傷はなく、10日には執務を再開できた。

ところで石坂は、入社して2年目の大正6年9月に外遊に出かけている(本人の弁では入社時の約束とある)。国内ではこのとき同時に金輸出禁止が発令された。国内の景気は悪く、生保も業績不振のとき、約束があったとしても、入社2年目の石坂の外遊が延期されなかったのに驚く。矢野恒太の度量の大きさがなさしめたに違いない。

金輸出の禁止は長くつづき、解禁は昭和5年1月に行われた。しかし不況は全国的にさらに深刻化、政府は不況対策の一環として生保に対して保有株の売却を自粛するよう要請した。しかし、相場の低落はなお続き、矢野社長は、他生保に声をかけて昭和5年10月生保証券株式会社が設立された。12社が参加した。その結果、諸株は値上がりし、市場は活気を取り戻し、昭和8年2月、解散した。

9年11月、臨時利得税法案が発表されると、市場は恐慌相場に見舞われ、生保に対して積極買いを東証から要請された。矢野社長は、創立委員長となって、第2次生保証券株式会社に10年8月発足させ、役員としては石坂専務が、監事として一人入った。会社は、昭和18年までつづいた。

なお、生保共同証券は、戦後の昭和39年1月にも証券不況対策として日本共同証券株式会社が設立されている。

業界地位は、昭和7年(1932年)8月に保有契約高が10億円に達し、民営39社中で日本生命に次ぎ2位となった。創業以来30年、矢野恒太、石坂泰三以下の努力が実った。

そして昭和9年(1934年)11月、石坂泰三は専務取締役就任、矢野恒太に次いで二人目の専務となった。また、矢野恒太の長男、矢野一郎が、10月に三菱銀行を退行して入社、初代の財務課長となった。

(つづく)

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所: 〒116-0001 荒川区町屋3-2-110

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話・FAX: 03-3819-7